▽題字『水一筋』　兵藤 秀子

▽表紙写真

昭和11年ベルリンオリンピック大会
女子200ｍ平泳ぎで優勝した直後の写真
「喜びを満面の笑みで観衆に手を挙げる前畑秀子嬢」
写真提供／椙山女学園歴史文化館

▽裏表紙写真

ベルリンオリンピックで取得した金メダルのレプリカ（本物は、昭和20年の名古屋大空襲で焼失）。戦後、椙山正弍校長より兵藤秀子に贈られたもの
所蔵／兵藤大二郎（孫）
写真提供／椙山女学園歴史文化館

▽表紙カバー折込などに使用のキャラクター『まめはた』

前畑秀子さんのイメージキャラクター
秀子の生家の家業が豆腐屋さんでした。豆腐の原材料の大豆をかたどって、顔の部分とし、両手はスイスイと泳いだイメージです
元前畑秀子朝ドラ誘致実行委員会　作

日本水泳界の第一人者へ

写真提供/林典子

紀の川（妻の浦）
橋小水泳部優勝の記念撮影

写真提供/林典子

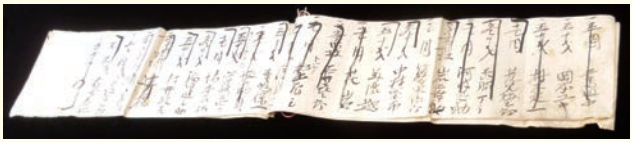
昭和3年9月23日
第5回日本女子オリムピック大会　優勝旗と前畑

アサヒ・スポーツ
1929年9月15日

昭和４年8月7-10日　全米女子水上競技選手権大会（ハワイ）
女子水泳界初の海外遠征の４人とコーチ
（前畑、菊池、中村、飯村選手と一人おいて松澤監督）

写真提供/橋本市郷土資料館

紀の川練習場の飛込岩の二人
（左/前畑　右/小島）



ハワイ遠征時、
橋本町の皆様からの
御餞別之帳

世界へ羽ばたく

昭和5年度第6回日本選手権200m平泳ぎ一等
（この後7連覇）
所蔵/橋本市郷土資料館

所蔵/橋本市郷土資料館

昭和5年4月19日　昭和5（1930）年度
日本記録証50m平泳ぎ/43秒0（日本新）
日本水上競技連盟会長/末弘厳太郎

昭和7年7月30-8月14日　第10回ロサンゼルス
オリンピック大会　開会式（メインスタジアム）
写真提供/椙山女学園歴史文化館

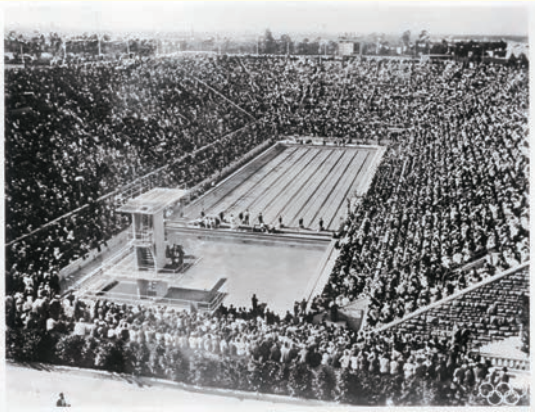
ロサンゼルス大会へ大洋丸で航海中
（左から守岡初子選手、小島一枝選手、
前畑秀子選手、白山ひろ子女子競泳コーチ
兼シャペロン）
写真提供/林典子

写真提供/林典子

ロス準決勝スタート
スタート台から飛び込む直前　前畑7コース

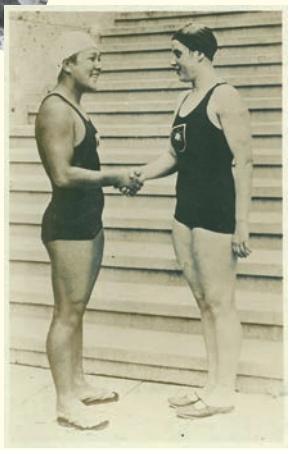
昭和7年9月20日
椙山正弌校長は、前畑の金メダルの獲得を願って、昭和7年9月20日、前畑秀子嬢の母堂碑を橋本市古佐田地内に建立されました。母堂建碑正面の左側には「第十回国際オリンピック優勝記念」と刻まれている。

いよいよその時が、国民が歓喜した涙と感動の金メダル



昭和11年8月11-16日　第11回ベルリンオリンピック大会
水泳競技場に満員の観客
写真提供/林典子

戦いを終えた選手、お互い皆を讃えプール内で記念撮影（上/ゲネンゲル、二番目/前畑）
写真提供/
椙山女学園歴史文化館



レースを終え、宿敵ゲネンゲル（ドイツ）と健闘を讃え握手する前畑　写真提供/中野正蔵

報知新聞
號外
君が代二回吹奏さる
鬼神も泣く死闘の後
前畑嬢の覇業成る!!
二百米平泳の大接戦
堂々世界記録を作り
八百リレーにも優勝
米國を十八米引離す

号外（報知新聞）
昭和11年8月12日

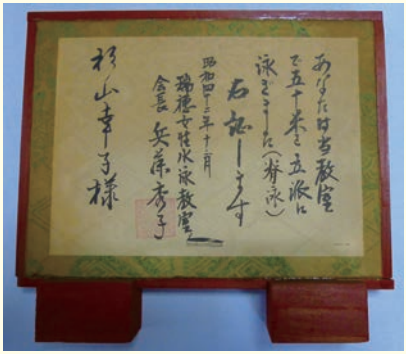
報知新聞
昭和11年8月12日

昭和11年8月11日深夜零時をまわる時刻
橋本尋常高等小学校の喜びに沸く近くの人々が校庭に繰り出す
写真提供/林典子

昭和11年10月7日
ベルリン凱旋、橋本駅に大勢の人が出迎える
写真提供/林典子

昭和11年10月6日　写真提供/椙山女学園歴史文化館
ベルリン凱旋、椙山女学園の校庭で盛大な歓迎（前列左から前畑・小島選手、天野部長）

水一筋の生涯「一に努力　二に努力　三また努力」
そして、「やりかけたことは最後までやり遂げる」



昭和42年　兵藤秀子が最初に開校した「瑞穂女性水泳教室」の受講者への終了認定証の盾

晩年、水泳教室で子どもたちを温かく指導する兵藤秀子

写真提供/
橋本市郷土資料館

昭和54年　ロサンゼルス・オリンピック記念プールで殿堂入りを記念して手形をとる　写真提供/わかやまスポーツ伝承館

昭和8年9月30日・10月1日世界記録証は、第7回明治神宮大会「記録を作る会」女子平泳ぎ200m・400m・500mの3つで世界記録を樹立。400m6分24秒8。

所蔵・写真提供/
椙山女学園歴史文化館

平成3年10月10日　放送NHKテレビドラマ「前畑がんばれ」の撮影時に秀子役の女優清水美沙氏との記念撮影

尾張冨士大宮浅間神社（愛知県犬山市）
石上げ祭/奉納献石

平成3年7月17日　橋本市民プール開場式に来賓で招かれた兵藤（旧姓前畑）さんと城（旧姓小島）さんがプールサイドにて記念写真　写真提供/林典子

はじめに

橋本市の誇り前畑秀子さんの顕彰は、会員が「二〇〇六年は金メダル七十周年やな」とつぶやいたのがきっかけで始まりました。

以来、幾多の活動や運動を行ってきました。二〇一五年（平成二十七年）からは『広報はしもと』に、東海学園大学木村華織先生の寄稿による「前畑秀子ストーリー」三十三ヶ月にわたり連載されました。これを冊子にできないかと思ったのが、結果としてこのような形になりました。遠く離れたところの木村先生とのご縁も前畑によるものです。

本書「水一筋」は、前畑秀子無心の人生にまつわるものを収録しています。誰でもこの本を手に取っていただければ前畑がわかる・・・を目指しました。

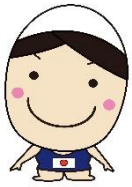
本書が活用され、郷土の誇り「前畑秀子」が、今日は勿論、末永く受け継がれてゆく一助になることを願ってやみません。

橋本市まちの歴史資料保存会　会長　村木　宏

目　次

はじめに　……　村木　宏　……　1
目　次　……　2
第一章　前畑（兵藤）秀子の生涯を綴る　…　木村華織　著　…　5
第二章　それぞれの「前畑秀子」　ーオリンピックイヤーに　……
……　椙山女学園歴史文化館　館長　椙山美恵子　著　…　77

第三章　前畑（兵藤）秀子関係資料　……
……　橋本市まちの歴史資料保存会　編　……　83
(1)　金メダル獲得『感動』の前畑秀子日記　……　83
(2)　寄稿集　秀子さんとの出会い　……　121
(3)　前畑秀子にかかわる語録集　……　147
(4)　前畑（兵藤）秀子年譜　……　165
(5)　前畑秀子水泳記録　……　177
(6)　橋本市まちの歴史資料保存会の活動と本書出版の経緯　……　199
あとがき　……　木村華織　……　210
協力者　……　212
著者略歴・橋本市まちの歴史資料保存会々員名簿　……　214



第一章　前畑（兵藤）秀子の生涯を綴る

東海学園大学スポーツ健康科学部　木村華織著

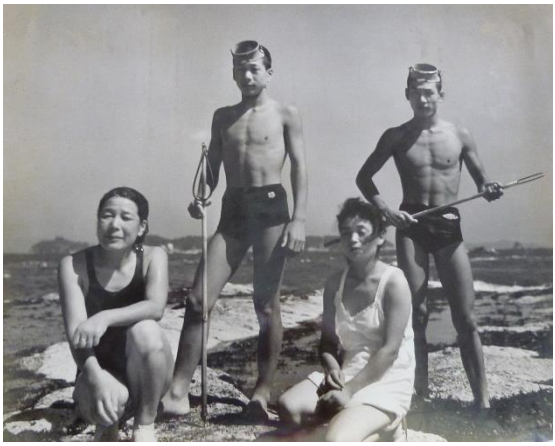
第一章　目　次

第一話　プロローグ
第二話　はじまりの人
第三話　旅のはじまり
第四話　紀の川という場所
第五話　橋本小学校の存在
第六話　最初の歯車
第七話　全国大会初出場で初優勝
第八話　ひらかれた道
第九話　世界への第一歩
第十話　名古屋へ
第十一話　椙山第二高女での模範水泳
第十二話　スタートライン
第十三話　女性スポーツの黎明
第十四話　女性スポーツ組織
第十五話　椙山正弐校長の存在
第十六話　名古屋から全国へ
第十七話　名古屋から世界へ
第十八話　両親との別れ
第十九話　奮起の年
第二十話　ロサンゼルスへ
第二十一話　十分の一秒差
第二十二話　迷いと決意
第二十三話　世界記録の重圧
第二十四話　水泳界の変化
第二十五話　ベルリンへ
第二十六話　前畑ガンバレ
第二十七話　重圧から安堵へ
第二十八話　選手引退、そして新たな人生のはじまり

第一章　秀子の生涯を綴る　目次

第二十九話　突然の別れ
第三十話　再び水泳の道へ
第三十一話　オリンピック・オーダー
第三十二話　自己とのたたかい
第三十三話　人生の金メダル

夫/兵藤正彦（名古屋大学医学部助手）
1937（昭和 12）年 3 月 9 日
熱田神宮で挙式　秀子 22 歳



知多半島に家族旅行
後列右/長男正臣（後に歯科医）
後列左/次男正時（後にスイミングスクール経営）

第一話　プロローグ

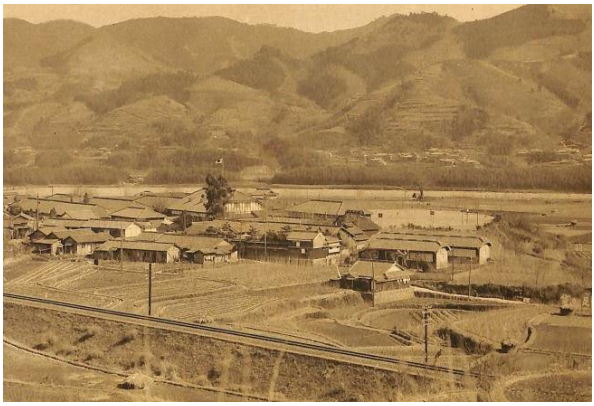
歴史は先人たちの積み重ねによってつくられ、記録は新たな挑戦者によって塗り替えられます。しかし、どちらも最初の一歩を記す人がいなければ、積み重ねることも塗り替えることもできません。

１９３６（昭和11）年８月11日、現在に繋がるはじめの一歩が、遠く離れた地、ベルリンで記されました。その一歩を刻んだ人物は、和歌山県伊都郡橋本町（現橋本市）出身の前畑秀子さんです。

前畑さんが日本女性初のオリンピック金メダリスト（女子２００メートル平泳ぎ）であることは、説明する必要もありませんね。しかし、前畑さんが水泳を通して何を学び、生涯を通じて何を伝えようとしていたのかを知る人は、決して多くはありません。

こうした視点から前畑さんの人生を振り返ってみると、前畑秀子という人が日本オリンピック史に、女性スポーツ史に、そして、ここ橋本に残した「何か」が見えてくるはずです。

本章では、選手としての萌芽をみる橋本時代、世界的な選手へと飛躍する椙山女学園時代、そして第二の水泳人生を歩み始めた指導者時代を取り上げながら、前畑さんの人生の軌跡をたどっていきたいと思います。



橋本尋常高等小学校（写真中央）

橋本尋常高等小学校　昭和３年３月
卒業アルバム写真の解説
「一千の児童を育む我等の母校の風景」

橋本尋常高等小学校　昭和４年３月
卒業アルバム写真
授業風景「書方・理科・国語」

第二話　はじまりの人

前畑さんが選手として活躍した１９２０年代から３０年代は、日本の女性スポーツ黎明期といわれています。

１９２０年以降、日本では高等女学校の生徒を対象にした競技会が漸次増加していきました。女子選手に国際大会出場の道が拓かれたのも、この頃からです。

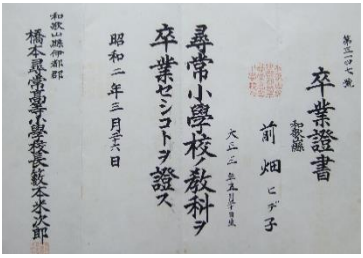
日本の女性で最初に海外で行われる国際競技会への出場を果たしたのは、陸上競技の人見（ひとみ）絹枝（きぬえ）さんです。人見さんが、第２回国際女子競技大会（スウェーデン・イエテボリ）に出場するために単身で渡欧したのは、１９２６年のことでした。それから3年後の１９２９年、日本女子選手団として初めての海外遠征が実現しました。派遣されたのは女子水泳選手４人とコーチ１人であり、そのうちの１人が、橋本尋常小学校高等科（以下、橋本小）に在籍していた前畑さんだったのです。

前畑さんは、ハワイで行われた全米女子水上競技選手権大会において、女子平泳ぎ１００

メートルで優勝、同２００メートルで２位という成績を残しました。これ以降、前畑さんを取り巻く状況は少しずつ変化していくことになります。

この年の10月、前畑さんは名古屋市にある椙山（すぎやま）第二高等女学校に編入し、創部されたばかりの水泳部で本格的に選手生活をスタートさせました。そして、日本水上競技連盟が女子選手の強化や普及に乗り出したのも、ちょうどこの頃からです。

女子水泳界の状況が変化を見せはじめ、今に続く土台を作ろうとするその時期に、前畑さんが存在することになるのです。


第三百七號
卒業證書
和歌山縣
前畑ヒデ子
大正二年五月廿日生
尋常小學校ノ教科ヲ卒業セシコトヲ證ス
昭和二年三月二十六日
和歌山縣伊都郡
橋本尋常高等小學校長藪本米次郎

前畑　橋本尋常小学校卒業證書
昭和二年三月二十六日
橋本尋常高等小学校長
藪本米次郎

築港プールで開催された主な大会		
1923年	（大正12年）	第6回極東大会
		大正12年5月22日～25日 当時はまだコースロープがなかった
		大毎中学校水上競技大会
1926年	（昭和元年）	日米対抗水上競技大会大阪大会
1927年	（昭和 2年）	第１回日本中等学校水上競技大会
		汎太平洋水上競技大会国際水上競技大会
1928年	（昭和 3年）	日米国際水泳競技大会大阪大会
1929年	（昭和 4年）	第２回日本中等学校水泳競技大会
1931年	（昭和 6年）	第４回日本中等学校水泳競技大会
1933年	（昭和 8年）	第６回日本中等学校水泳競技大会
1935年	（昭和10年）	日米国際水泳競技大会大阪大会
		第８回日本中等学校水泳競技大会
1936年	（昭和11年）	日本女子中等学校水泳競技大会
		日本選手権水泳競技大会水球大会

第三話　旅のはじまり

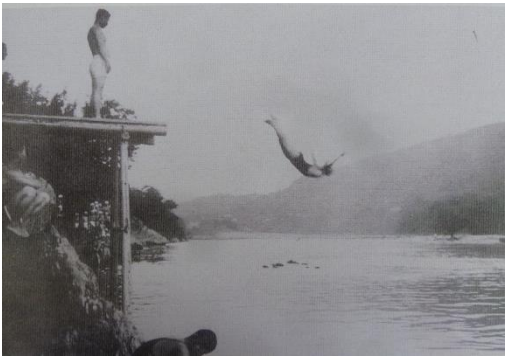
多くの場合、前畑さんの功績は「日本女性初のオリンピック金メダリスト」という点に集約されてしまいます。しかし、前畑さんのオリンピアンとしての功績を知るためには、彼女の選手時代、そして選手引退後の人生におけるできごとを、長い時間軸の中で俯瞰してみる必要があるでしょう。

以降では、橋本時代、椙山時代、選手引退後、晩年という時代区分によりながら、前畑さんの軌跡を辿っていきたいと思います。

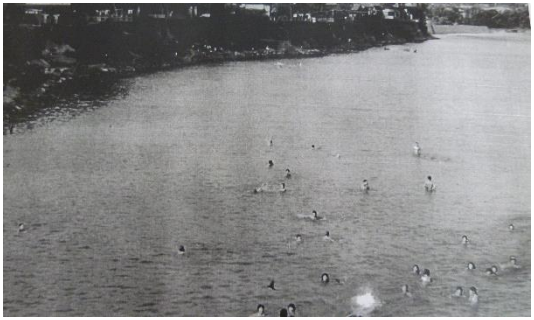
前畑さんは自らの言葉である「一に努力、二に努力、三また努力」を体現し、金メダル獲得を現実のものにしましたが、この「努力」という言葉の裏には、どのようなできごとがあったのでしょうか。また、生涯を通じて水泳にたずさわり、脳溢血（のういっけつ）という大病を煩った後もなお、プールサイドに立ち続けた背景にはどのような想いがあったのでしょうか。

これらの答えを見つけるためのスタート地点は、前畑秀子生誕の地「橋本」です。橋本は

市の中心部を東西にわたって紀の川が流れる水の豊かな地域です。当時の妻の浦は川幅が１００メートル近くあり、水量は現在の４倍とも５倍ともいわれています。前畑さんの日常の遊び場だった紀の川、そこに天然プールを造り水泳指導を始めた橋本小学校、彼女を後押しした先生たち、前畑さんの誕生に欠かせない出会いや場所、そして時間が、ここに橋本にはあるのです。



昔の紀の川
水泳練習所/飛込みの練習



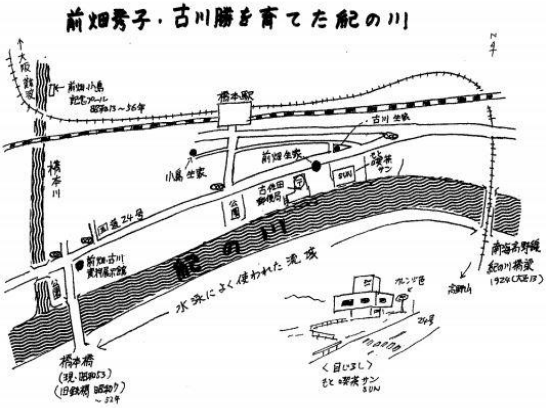
昔の紀の川
夏の風物詩/町民の遊泳風景

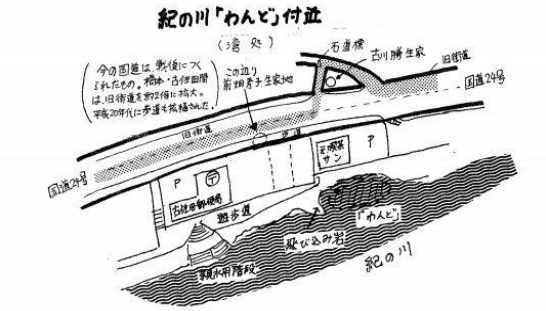
第四話　紀の川という場所

本人にとってはごく当たり前だと思っていたことが、後の人生を方向付ける重要な場所や時間になることがあります。当時の紀の川では、夏になると老若男女問わず多くの人たちが水遊びを楽しんでいたといいます。前畑さんもその一人です。そんな当たり前の場所が、金メダリスト前畑秀子の誕生には欠かせない場所だったのです。

当時は、プールをもつ学校などほとんどありません。そのため、水泳の実施や選手誕生には、地理的な環境が多分に影響していました。それを示すように、昭和戦前期には、奈良県を流れる吉野川や和歌山県を流れる紀の川沿いに位置する小・中学校から、多くの水泳選手が誕生しています。女子水泳では前畑さんの他にも、１９３２（昭和７）年ロサンゼルス五輪、１９３６（昭和11）年のベルリン五輪に出場した橋本小出身の小島一枝（こじまかずえ）さん、妙寺小出身の守岡初子（もりおかはつこ）さんがいます。両大会に出場している女子選手は、前畑さんを含めこの３人だけです。オリンピック出場時には、プールの備わった異郷の地で生活していた３人ですが、

尋常小学校・高等小学校卒業後も異境の地で「水泳を続ける」という新たな道を開いたという点で、紀の川の存在は欠かせません。そして、その場所に天然プールを造って水泳指導を始めた橋本小学校の存在もまた、見逃すことはできないでしょう。





前畑が生まれた橋本町
前畑を育てた紀の川（ワンド）

第五話　橋本小学校の存在

偉大な選手誕生には、本人の能力はもちろんのこと、地理、施設、人、そして経済的なことなど、さまざまな環境的要因があります。それら複数の要因が時や場所、その組み合わせを変えながら、歯車となって選手を一流へと押し上げていくのでしょう。

紀の川の存在が、前畑さんの人生を方向づける一要因であったことは、すでに述べた通りです。第五話では、前畑さんの母校である橋本小に焦点をあてたいと思います。

橋本小の水泳部が創部されたのは前畑さんが小学４年生になった１９２４（大正13）年です。この前年、橋本小学校では、３年生以上を対象にした水泳指導が紀の川で行われました。最終日に実施された泳力試験で１０００メートルを完泳した児童は、翌年創部する水泳部に入部させてもらえるというのです。前畑さんも蛙泳ぎと犬かき泳ぎを駆使して必死に１０００メートルを泳ぎ切り、最年少部員として水泳部に名を連ねたのです。１９２４年、橋本小学校に水泳部が創部されました。まさに選手、前畑秀子の始まりの瞬間です。

これ以降、昭和戦前期において、橋本小は全国でも有数の水泳強豪校として名を轟かせていきます。水泳好きの少女を選手へと導いた橋本小の存在は大きく、またこの頃を境に、前畑さんを取り巻くさまざまな歯車が、少しずつ動き始めていくのです。

橋本尋常高等小学校水泳部員の集合写真（昭和２年）
前畑高等科１年生
「一つの日本女子最高記録と
七つの学童記録とを保有する我が水泳部

第六話　最初の歯車

前畑さんを一流へと押し上げるための最初の歯車は、水泳部の設置と紀の川に造られた天然プール、そしてプールを造った熱心な橋本小の教員たちだったのではないでしょうか。橋本小水泳部の練習は、紀の川にある湾の中に天然プールを造って行われていました。川底に向かって杭を打ち、片側は杭の上に板を張ってスタート用に、もう片側はターンができるように板を杭に沿わせるようにして水中に打ちつけ、最後に縄でコースロープを張り完成です。とはいえ、台風や大雨に見舞われればひとたまりもありません。その度に造り直すのです。

前畑さんの自伝によれば、水泳部の指導は、後に橋本小学校の校長になる西中武吉先生の他、４人の教員が行っていたといいます。当時はまだ、クロールや平泳ぎなどの近代泳法が一般に普及されていない時代です。そのため指導できる人も少なく、橋本小の教員たちは大阪まで近代泳法を習いに出掛けては、部員たちに教授していました。

天然プールを造り、子どもたちに水泳を教えようとする教員たちの姿が、前畑さんに平泳

ぎとの出会いをもたらし、彼女の人生を予想だにしない方向へと向かわせていくのです。水泳部の創部が彼女を後押しする大きな力となり、その後も諦めかけていた高等小学校進学を現実のものにしていくのです。

（付記）橋本小や前畑さんへの水泳指導については、教員のほかにも大日本武徳会から小学校に指導者が派遣されていたなど諸説あるが、現時点では筆者自身、十分な検討ができていない。そのため、本稿では、自伝に基づく記述に留めた。

前畑秀子選手誕生の陰の立役者
恩師/橋本尋常高等小学校校長
西中武吉（にしなか ぶきち）
西中校長家族との写真
前列左端/前畑秀子
後列右端/同郷後輩小島一枝選手

第七話　全国大会初出場で初優勝

前畑さんの選手としての公式記録は、１９２６（大正15）年からみることができます。当時発行されていた「運動年鑑」という雑誌には、日本国内で行われた様々な競技大会の記録が掲載されており、前畑さんの記録も１９２６年から１９３６（昭和11）年までの間、毎年掲載されていました。前畑さんの自伝「前畑ガンバレ」では、１９２６年よりも以前に水泳大会に出場したことが記されていますが、ここでは公式記録を取り上げ前畑さんの活躍振りをみてみましょう。

「運動年鑑」には、全国大会から地区大会まであらゆる記録が掲載されていますが、前畑さんの最初の記録は全国大会での優勝を伝えるものでした。１９２６年８月20日、大阪浜寺納涼園プールで第２回全日本学童競泳大会が開催されました。前畑さんにとって初めての全国大会です。結果は、５０メートル平泳ぎ、５０メートル自由形、１００メートルリレーの３種目で優勝です。

同年に開催された第３回日本女子オリンピック大会では、学童の部の１００メートル平泳ぎ、２００メートルリレーで優勝を果たしました。リレーは当時の学童新記録です。そして遂に、１９２７年には１００メートル平泳ぎで日本新記録を樹立することになるのです。

瞬く間に日本一になり、平泳ぎ選手として名を轟かすことになる前畑さんですが、実は自由形もかなりの実力の持ち主だったようです。自由形やリレー種目での優勝がそのことを示しているでしょう。

他方、前畑さんの活躍ばかりに目がいきがちですが、チームで出場するリレー種目での優勝は、橋本小水泳部の飛躍の証です。前畑さんを後押ししていたものは何かという視点から当時を振り返ると、そこには切磋琢磨できる仲間や熱心な指導者の姿もみえてくるのです。

第三回
日本女子オリムピック大会
（大正 15 年 9 月 19 日）
▽女子平泳ぎ 100m/１位
▽女子 200mリレー/優勝
学童新

第九話　世界への第一歩

１９２９（昭和４）年、前畑さんにも国際大会出場の機会がやってきました。この年、全米女子水上競技選手権大会がハワイで開催されることとなり、日本の女性選手たちにも招待状が届きました。

これを受け、日本水上競技連盟は6月30日の午後一時より、玉川プールで選手選考会を開催しました。選考の結果、平泳ぎの前畑さんと飯村昌子さん、背泳ぎの菊池貴美子さん、自由形の中村由喜枝さんの４名が派遣されることになりました。選手団は選手４名に監督１名を加えた5名で結成されました。日本初の女性選手団の海外遠征が実現し、女子水泳の国際化に向けた口火が切られたのです。

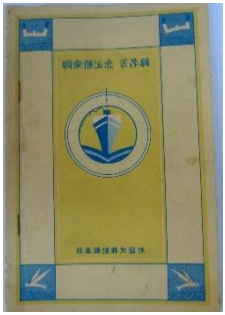
ハワイでの試合当日（8月10日、ホノルル）は、国内予選会で日本新記録を樹立した前畑さんに注目が集まりました。２００メートル平泳ぎは、アメリカの第一人者ゲラティ選手との一騎打ちです。前畑さんは、レース中盤で2メートル近くリードしたものの、接戦の末、

惜敗してしまいます。しかし、ゲラティ選手は試合後にこんなことを述べたそうです。「私にとっては今までこれほど苦戦したことはない」。これに対し前畑さんは「ただ一生懸命でした」とのみ語ったそうです。（大日本体育協会史下巻より）。

こうして無事に終了した女子水泳選手団のハワイ遠征でしたが、前畑さんの胸中は複雑でした。「春を迎え高等科を卒業したらもう泳げなくなる・・・」という思いが、脳裏にあったからです。しかし、このハワイ遠征は、前畑さんの今後の人生行路を決定づける重要な機会だったといえるでしょう。

帰国後、前畑さんは名古屋にある椙山女学園（当時の椙山第二高等女学校）に編入することになります。ここでもまた、一生懸命に全力を尽くした結果が、次に繋がる道をひらいたのです。

ハワイ遠征時の
御餞別帳
橋本町の皆さま
昭和４年７月 10 日



ハワイ遠征時の
乗船名簿
昭和４年７月 19 日
～8 月 6 日
春洋丸
（日本郵船 K.K.）

第十話　名古屋へ

「もう泳げなくなってしまう」という複雑な心境の中、ハワイから帰国した前畑さんが目にしたのは、歓喜に溢れた橋本町民の姿でした。そんなとき、名古屋にある椙山第二高等女学校（現在の椙山女学園、以下では椙山第二高女とする）から、自校で行う第１回東海女子学童競泳大会で模範水泳をして欲しいという話が、西中先生（尋常小学校高等科時代の校長）を通じて舞い込んできたのです。

椙山第二高女は第一次世界大戦後の女子教育において、体育や運動の奨励に力を入れていた女学校の一つです。学校長である椙山正弌先生は、１９２１（大正10）年４月から約３ヶ月に渡りアメリカ視察を行い、帰国後には「アメリカ視察をして教育に関する考え方が大きく変わりました」（『学園五十年を語る』より）と述べています。アメリカでの女子教育を目の当たりにした椙山校長は、椙山第二高女を開設した１９２４（大正13）年以降、運動施設の拡充と近代化を図り、１９２８（昭和３）年には国内の高等女学校で最初の屋内プールを

設置しました。そして、その翌年に前畑さんが編入することになるのです。つまり、椙山第二高女における教育方針において、運動という身体活動が必要な要素して位置づけられるその頃に、前畑さんが編入し、選手としての活躍を始めたのです。

ハワイから帰国した前畑さんは、西中先生とともに椙山第二高女を訪れました。そして、学童競泳大会での模範水泳終了後、椙山第二高女の椙山正弌校長から編入の誘いを受けたそうです。それから約一か月後の１９２９（昭和４）年10月５日、前畑さんは椙山第二高女の３年生に編入しました。

どのような経緯で編入に至ったのか定かではありません。しかし、西中先生と椙山校長が、選手・前畑秀子誕生の陰の立役者であることには違いなさそうです。

前畑秀子選手誕生
陰の立役者・恩師
椙山第二高等女学校
校長　椙山正弌
（すぎやま　まさかず）

第十一話　椙山第二高女での模範水泳

１９２９（昭和４）年９月15日、前畑さんが椙山第二高女のプールで行った模範水泳（第一回東海女子学童競泳大会）の様子について、椙山女学園校友会誌『糸菊』の記事を取り上げてみていきたいと思います。『糸菊』（昭和４年号）には、模範水泳当日の様子が次のように記されていました。

プログラムは進み前畑さんの遊泳の番が来た。スタンドはどよめき渡り「水の女王」「水の女王」あの年若い娘がハワイまで遠征し日本女子の為に気を吐いてくれたのかなどの声が聞こえる。〈略〉今スタートについた十六歳と思われぬ均整のとれたよく発達した身体水着の胸間には日章旗が輝いている。〈略〉あのスタイルで米国女子水泳レコードホルダーたるゲラティ嬢を破ったのだ。ピストルは鳴った。鮮やかなフォーム感嘆せざるを得なかった。観覧者はなりを静めて見守った。やがて自ら上がり一礼して控え室に帰る

態度のつゝましさ。良き印象をあたえずにはおかなかった。

生徒たちの目に映った前畑さんの姿は、力強くも慎ましいものであり、当時理想とされていた女性像「良妻賢母像」に近かったのでしょう。

前畑さんの編入をきっかけに興隆した椙山第二高女における運動奨励は、椙山校長にとって女子教育へ新たな挑戦だったのかもしれません。先の記事にある前畑さんの姿から、彼女に求められていたものは選手としての活躍に留まらず、その他にも多分にあったことが読み取れるのです。

椙山女学園室内プール
前畑模範水泳
（昭和４年９月 15 日）
大勢の学生が観覧

前畑添書き
「見ヨ我等カッパ!
プール開き」

第十二話　スタートライン

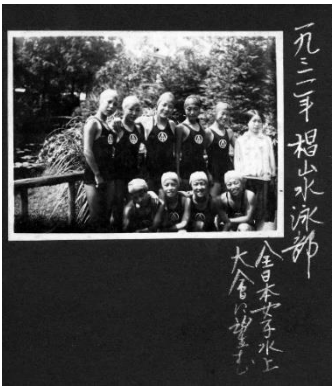
尋常小学校高等科卒業後は、稼業を手伝うことを求められていた前畑さんにとって、高等女学校への進学は、努力の産物といっても良いでしょう。何事にも全力を尽くす前畑さんの姿が新たな道を拓き、今度は椙山第二高女への編入を現実のものとしました。小学校時代から水泳選手として活躍してきた前畑さんですが、本格的な選手生活のスタートは椙山第二高女編入後からになります。

『糸菊』（昭和４年号）には、前畑さんが編入してきた当時の様子が次のように記されています。「学校全体とりわけ部員の待ちもうけた日は来た。お母様と一緒に来校された、無事入学なさった。今日から椙山女学校水泳部員として共に技を磨くことが出来るのだ部員の練習振は全く面目を一新した」とあり、学校の歓迎ムードが伝わってきます。椙山第二高女の在学生だけでなく、きっと前畑さんも新天地に胸を躍らせていたことでしょう。

しかし、前畑さんがついたスタートラインは、自己記録への挑戦やライバルとの勝負など、

選手としての始まりのみを意味するものではありませんでした。それは、押し寄せてくる国民からの期待や目に見えない重圧との闘いの始まりでもあったのです。

この先、前畑さんは多くの苦難に直面することになります。しかし、彼女は「どんなにいい記録がでても、自分一人で泳いでいると思ってはいけないよ。〈略〉たくさんの人が後押ししてくれるから、泳げるんだと思わなければいけないよ」（『前畑ガンバレ』より）という母からの教えを支えに、それらを乗り越えていくのです。



1932（昭和７）年　椙山水泳部

前畑添書き
「全日本女子水上大会に望む」

1934（昭和９）年
椙山水泳部一同

前畑添書き
「カッパの顔ブレ」

第十三話　女性スポーツの黎明（れいめい）

前畑さんが活躍を始める以前の日本の女性スポーツについて触れておきたいと思います。

国内における女性のための競技会の発展は１９２０年以降とされ、校内大会や他校との対校戦、地域規模の競技会を経て、１９２２（大正11）年には種目別の全国大会や複数の競技を取り入れた総合競技大会へと発展します。

こうした中で、「日本女子スポーツ連盟」が設立されたことは、その後の日本の女性スポーツにおいて重要なできごとだったといえます。この組織は、陸上競技の人見絹枝さんを国際大会に派遣するために設立され、設立後は女学生に対する運動奨励や女性指導者の育成に力を尽くした、日本初の女性スポーツ組織です。

日本における女性スポーツの草分け的存在である人見さんは、１９２６（大正15）年に国際女子スポーツ連盟が主催する第２回国際女子競技大会（イエテボリ）に単身で参加し、個人総合優勝を果たしました。オリンピックの陸上競技において、初めて女子種目が採用され

た１９２８（昭和３）年のオリンピック・アムステルダム大会では、女子８００メートルで日本女性として最初のメダル（銀メダル）を獲得したのです。

この翌年、前畑さんが派遣された日本の女性選手団初の海外遠征（ハワイ）が実現したのです。このように、陸上競技と水泳を中心にしながら女性スポーツが国際化していく１９２０年代から３０年代は、国際化と同時に国内の女性スポーツや競技会が発展する時期でもありました。

この背景については、人見さんの活躍に加え、女子中等教育の普及と学校体操教授要目（現学習指導要領）へのスポーツ種目の採用、そしてスポーツ組織の成立といった複数の影響があったと考えられます。

水泳については、１９２２年に開催された萬朝報主催の全国女子競泳大会が最初の全国大会だとされていまが、その開催は陸上競技と同様に、大日本体育協会や競技団体ではなく、初期においては新聞社や女性スポーツ組織が担っていたのです。

第十五話

椙山（すぎやま）正弍校長の存在

金メダリスト前畑秀子誕生の背景には、橋本小や紀の川の他に、女子教育の再編や女性スポーツ組織の誕生、さらには、従来の教育方針を転換し、スポーツを人間教育の重要な要素に位置づけた椙山第二高女など、複数の要因が関係していました。その中でも、椙山第二高女の椙山正弍校長の存在を欠かすことはできません。

椙山校長は、練習環境を準備しただけでなく、前畑さんが編入してから結婚するまでの期間、彼女の学資および生活にかかるすべての金銭的負担を引き受けていました。前畑さんが高等女学校を卒業し、椙山女子専門学校に進学してからは、自宅の２階に前畑さんを下宿させ、校長夫妻が生活に関わる躾を施すなど、前畑さんの亡き両親に代わり親としての役割を担っていたといいます。そして椙山校長が、前畑さんへの教育において最も心を配ったのが、人格の陶冶だったといいます。

ベルリン五輪後に発行された『水の女王前畑秀子物語』には、「どんなに大選手になっても心が高慢ちきだったり、曲がっていてはそれは大選手とはいえない。立派な心がけと高い記録の両方をもってこそ本当の大選手となれる」という校長の訓諭（くんゆ）が記されていました。

前畑さんは、水泳選手としての活動だけでなく、学業や生活態度を含む人間教育を享受する中で、日本を代表する選手へと成長していくのです。

前畑さんの亡き両親の親代わり

椙山女学園

椙山正弌校長と今子（いまこ）夫人

第十六話　名古屋から全国へ

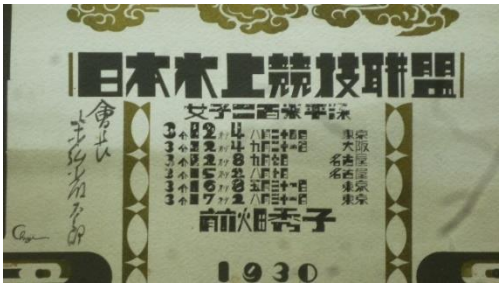
１９３０（昭和５）年、椙山女第二高女水泳部は前畑さんを部員に加え、創部３年目のシーズンを迎えました。「部員も年毎にその数を増やし今や総数四十を越えんとし昨秋前畑秀子を部員に加ふることを得、人員ようやく整ひて次の、如き戦績を得たり」（『糸菊』昭和五年号より）とあるように、椙山第二高女水泳部の活動は、前畑さんの入部を境に発展していくこととなります。

女子平泳ぎで前畑さんの右に出る者は国内にはもういません。出場する試合では次々と日本新記録を連発し、１９３０年の日本水泳十傑では、50メートル、１００メートル、２００メートルで2位を大きく引き離してトップに立ちました。

この頃、愛知県内には前畑さん以外にも全国で上位に入る選手たちがいました。愛知淑徳高女の加藤好子さん（背泳ぎ）や愛知県第一高女の神谷春子さん（自由形）たちです。１９３０年時点でプールをもつ女学校・高等女学校は全国で19校、そのうち３校が名古屋市に所在

していました。プールを造ってまで女学生に運動を奨励しようとした教育者の存在と施設環境の整備が、多くの選手を名古屋から誕生させたのでしょう。

女子水泳の黎明期を牽引してきた京都、大阪、東京に、前畑有する名古屋が加わり、日本の女子水泳界が一気に動き始めるのです。



日本記録証　前畑　1930（昭和 5）年
上/女子 50m平泳 中/女子 100m平泳 下/女子 200m平泳
中段の 100 平泳は、1 年間で日本記録を 5 回更新の記載
左下に、日本水上競技連盟初代会長
末弘厳太郎（すえひろ いずたろう）の直筆

第十七話　名古屋から世界へ

今でこそ屋内温水プールが主流となり、1年を通して水中練習をすることが可能になりましたが、温水設備を備えていなかった椙山・愛知淑徳・愛知県第一高女のプールでは、冬の間は泳げませんでした。ですから、この期間はランニングやバスケットボールが練習の中心でした。屋内温水プールなどほとんどなかった当時は、陸上での冬季練習を徹底することで体力づくりをしていたのです。

一方、驚くことに、長期休暇には東京に出掛けて練習することもあったようです。前畑さんは入学して半年後の１９３０（昭和５）年３月から1ヶ月半にわたり、東京ＹＷＣＡのプールで合宿練習を行っていました。このプールは、当時の日本に唯一存在した女性専用屋内温水プールです。

シーズンを迎え、冬季練習は早々に実を結びました。その年の５月、東京神宮プールで第９回極東大会が開催され、前畑さんは女子２００メートル平泳ぎに出場しました。昨年ハワ

イで惜敗したゲラティ選手の記録を上回る３分16秒８の日本記録を樹立し、さらに８月の日本選手権では、それを上回る３分12秒４で優勝しました。自身の日本記録を１年間で７秒４も更新したことになります。当時の女子２００メートル平泳ぎの世界記録は、３分11秒２です。１９３０年のシーズンを終え、前畑さんと世界との距離は一気に縮まったといえるでしょう。

極東大会優勝記念並
海外派遣選手送別女子体育大会
1930（昭和５）年
メダルに「ＶＥＮＩ　ＶＩＤＩ　ＶＩＣＩ」
（来た、見た、勝った）と記されている

第９回極東選手権競技大会
昭和５年５月

第十八話　両親との別れ

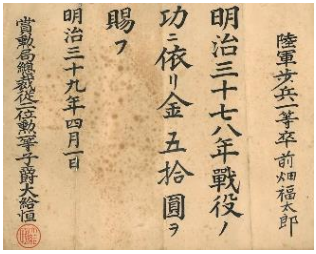
前畑さんにとって、椙山第二高女に編入して初めて迎えた１９３０（昭和５）年のシーズンは、世界との距離が瞬く間に縮まった充実の年でした。ところがその矢先です。前畑さんは両親の死という堪え難い現実に直面することになります。

１９３１（昭和６）年1月に母親を脳溢血で亡くし、同年６月には父親をも亡くしました。当時16歳だった前畑さんにとって、両親の死が人生上の大きなできごとであったことは、想像に難くありません。母親の死後、故郷の橋本に戻った前畑さんは、病に倒れた父の看病をしながら暮らしていました。そして父親の他界後には、椙山校長宛に退学の希望を記した手紙を出したそうです。

しかし、ここまでやってきた水泳をやめることの方が親不孝であるという周囲の説得、家族の協力、そして椙山第二高女の同窓生の熱意に動かされ、前畑さんは再び名古屋へと戻ったのです。復学後の状況を次のように述べています。

「その夏、初めてのスランプに陥りました。力いっぱい泳いでも、重いからだを引きずっている、やっと泳いでいる感じです。競技会にもつぎつぎ出場しましたが、記録は惨憺たるものでした」(『前畑ガンバレ』より)。

水泳から離れていた期間の遅れを取り戻すことは、前畑さんといえども容易ではありませんでした。とはいえ、猛練習の末に１９３１年10月に行われた日本選手権兼オリンピック第１次予選会では、女子２００メートル平泳ぎで３分12秒６という自己記録に迫るタイムで優勝しました。しかし、その後もオリンピック・ロサンゼルス大会を翌年に控えた焦りと不安が、前畑さんを襲います。そんな時でした。亡き母が夢に現れ、前畑さんを奮起させるのです。



父福太郎
日露戦争功労金
陸軍歩兵一等卒
授与/明治 39 年

第十九話　奮起の年

１９３１（昭和６）年は、前畑さんにとって両親との別れという堪え難い悲しみに襲われた年でした。十分な練習ができなかった期間を取り戻すかのように、名古屋に戻った前畑さんは練習に明け暮れたといいます。自己記録に近い状態までに復調した前畑さんでしたが、思うようには泳げない不安が前畑さんを襲いました。

年が明け、１９３２（昭和７）年を迎えました。ロサンゼルス大会の選考会を半年後に控えたある晩、亡き母が夢に現れたといいます。「秀子、がんばるんだよ！」、そう言って自分を励ます母の姿に背中を押され、前畑さんは「死にものぐるいになって、がんばってみよう」と奮起したのです。冬は陸上での練習、そして４月１日からはまだ水の冷たいプールで水中トレーニングを開始しました。泳ぎ続けることで次第に不振からも抜けだし、不安が自信へと変化していきました。

ところで、前畑さんがロサンゼルス大会に向けて練習を積み重ねていた１９３１年後半頃

から、日本水上競技連盟（現在の日本水泳連盟）にも変化が生じていました。それまで男子選手のみを強化や普及の対象にしてきた水泳連盟の中に、「女子委員会」を設置しようという話しが出てきたのです。このことは、ロサンゼルス大会に向けて女子水泳を強化対象に含めたことを意味していました。

１９３２年の３月には、前畑さんや小島一枝さんを含む女子選手たちを集めた強化合宿が、東京基督教女子青年会（東京ＹＷＣＡ）にて10日間に渡り行われました。水泳において初めて行われた水泳連盟主催の強化合宿でした。

橋本から生まれた前畑秀子という選手の存在が、水泳連盟をも動かす力になったのかもしれません。日本の女子水泳選手たちのオリンピック出場も目前です。

女子水泳競技会の
開催状況と
主催団体
（1922年-1939年）

●主催＿萬朝報
◇全国女子競泳大会
（水泳選手権大会）
1922（T.11）-1927（S.2）

●主催＿中央運動社/健母会/
日本女子スポーツ連盟/
日本女子體育連盟
◇日本女子オリムピック大会
（全国女子水泳競技）
1924（T.13）-1935（S.10）

◇女子中等学校対抗競泳
1927（S.2）-1931（S.6）

●主催＿日本女子水上競技連盟
◇全日本女子水上競技大会
1929（S.4）-1932（S.7）

◇全日本東西女子対抗水上競技大会
1930（S.5）-1932（S.7）
◇女子中等学校水泳大会
1931（S.6）

●主催＿日本水上競技連盟
◇三地方対抗女子水上競技大会
1933（S.8）-1935（S.10）

◇全国女子中等学校兼
女子一般水上競技大会
1936（S.11）-1939（S.14）

◇全日本選手権
1925（T.14）-1939（S.14）

『（論文）日本の女性スポーツ黎明期
における女子水泳の組織化スポーツと
ジェンダー研究vol.13
別冊2015年3月発行』P.42より

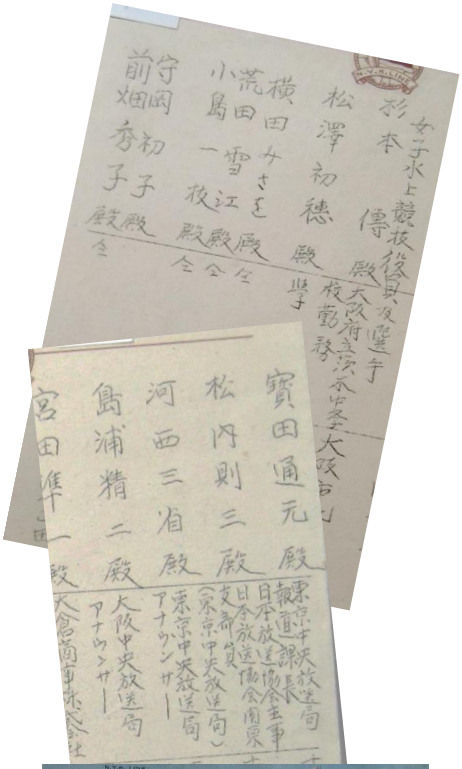
第二十話　ロサンゼルスへ

オリンピック・ロサンゼルス大会の最終予選会は、体調不良のため不出場だった前畑さんでしたが、これまでの実績から無事にロサンゼルス大会代表選手団に選出されました。水泳の代表選手団41名中、女子選手は競泳６名と飛込１名の計７名です。

このうち３名が和歌山県出身の選手です。橋本小出身の前畑さんと小島一枝さん、妙寺小出身の守岡初子さんが代表に選ばれました。この大会には女子陸上競技選手９名も出場しました。人見絹枝さんがただ一人の女性選手として参加したアムステルダム大会から４年、計16名の女性選手が日本代表選手団としてオリンピック出場を果たしたのです。

ロサンゼルスまでは20日間におよぶ船旅です。前畑さんは神戸港で大洋丸に乗船し、横浜、ホノルル、サンフランシスコを経由してロサンゼルスに向かいました。経由地で下船したときに現地のプールで泳ぐ以外は船上練習です。朝食後は甲板でデンマーク体操、水中練習は１日２回、倉庫にテントを張り巡らせ、海水を入れた小さなプールで行いました。

飛込選手は体をロープで縛って台の上からダイビングの練習、その他にも甲板で走る選手、槍をロープで縛って海に向かって投げる選手などがいたそうです。選手たちは様々な工夫を凝らしながらロサンゼルスへと向かったのです。



第10回ロサンゼルスオリンピック大会参加時の乗船名簿
昭和7年6月28日～7月18日大洋丸（日本郵船k.k.）
前畑秀子・小島一枝他に、ベルリンオリンピック感動の実況放送河西アナの名もある

第二十一話　十分の一秒差

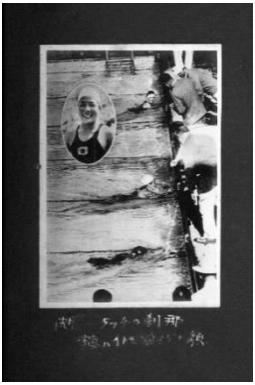
１９３２（昭和７）年７月30日、37の国と地域から１３３４名の選手が一堂に会し、第10回夏季オリンピック・ロサンゼルス大会が開幕しました。日本からは１３１名（男子１１５名、女子16名）の選手が出場しました。大会が始まると男子水泳は全６種目中５種目で優勝という大活躍です。

８月11日、女子平泳ぎ２００メートル予選の日がやってきました。前畑さんの出番です。予選の結果、前畑さんは３分10秒７でオーストラリアのデニス選手に継ぐ２位で決勝進出を決めました。

決勝はデニス選手、世界記録保持者のヤコブセン選手、前畑さんの３人の競い合いです。１５０メートルのターンはヤコブセン選手がトップ、僅差でデニス選手と前畑さんが続きます。ターン後にデニス選手がスパートし、今度はやや遅れたヤコブセン選手と前畑さんが二位争いです。残り５メートル、息継ぎなしで泳ぎ切った前畑さんは、１位のデニス選手に10

分の１秒と迫る２位でのゴールとなりました。３分６秒４の決勝記録は、前畑さん自身のもつ日本記録を５秒８も上回るオリンピック新記録でした。

大会前、日本チームの杉本傳（すぎもとつとう）コーチは、運が良くて３位と予想していたそうです。予想を上回る「十分の一秒差」での２位という結果が、安堵していた前畑さんを思わぬ方向へと向かわせることになるのです。



第 10 回ロサンゼルス大会
女子平泳ぎ 200m決勝フィニッシュ

前畑添書き
「タッチの刹那（せつな）」

ビクトリーセレモニー　台上に立ち、
メインポールに国旗が上がった時の気持ち

前畑の添え書き
「責任が果たせて泣けてきた」

第二十二話　迷いと決意

「何事も死力を尽くせばそれが自分のベストだ、死力を尽くせば出来ないことはない」この言葉を胸に、ロサンゼルス大会を戦い抜き、第2位という結果に胸をなで下ろして帰国した前畑さんでしたが、周囲の反応は予想に反するものでした。

「なぜ十分の一秒差で二位だったのか・・・」「なぜ金メダルをとってこなかったのか・・・」、前畑さんの想いとは裏腹に、現役続行を願う想いが潮の如く押し寄せてきました。しかし、次のオリンピックまでの4年間は長く、苦しいのです。たとえ努力したとしても優勝できる保証などどこにもありません。想像しただけでも逃げたくなるような状況です。

コーチの杉本傳氏は、『第十回羅府オリンピック大會水上競技報告書』の中で当時のことを次のように語っています。「十分の一秒差で惜しくも優勝を逸してしまったのは残念だと人々は思うかも知れないが、私はよくもまあ二位に食い込んだものだと云いたい。実際それが本当だ」。水泳を知る人からすれば前畑さんの成績は十分過ぎるものでしたが、世間はそれを理

解しませんでした。こうした中で4年後のオリンピックに向かうのは、生半可なことではありません。しかし、悩みに悩んだ末に、前畑さんはベルリンオリンピックへの挑戦を決意したのです。

第10回ロサンゼルスオリンピック大会
表彰式
1932（昭和7）年

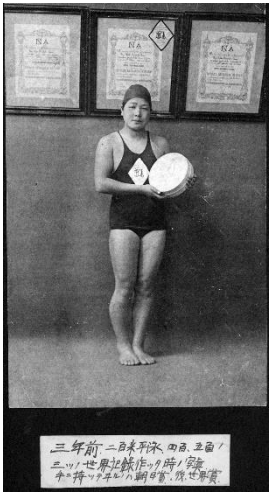
第二十三話
世界記録の重圧

４年後のオリンピック・ベルリン大会出場を目指すと決めた前畑さんにとって、目標はただ一つ、金メダル獲得でした。本人の目標というより、世間がそれしか許さなかったという方が適切かも知れません。ロサンゼルス大会以降の前畑さんには、国民の期待、国家代表の責務など、計り知れない重圧がのしかかっていきました。

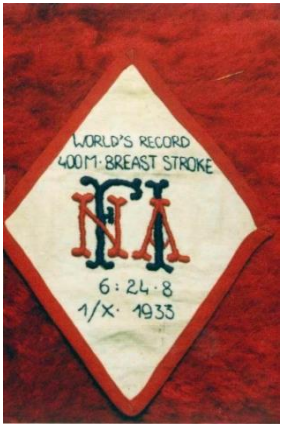
しかし、決めたからには歩みを止めるわけにはいきません。「いったんはじめたことは最後までやり抜く」、それが前畑さんの信念でもあったからです。一日２万キロ、一年３６５日練習ともいわれた前畑さんの猛練習は、早々に実を結びました。

１９３３（昭和８）年に行われた第７回神宮競技大会では、ベルリン大会を見据えて「記録を作る為の試泳会」が行われました。前畑さんはこの試泳会で世界新記録を樹立したのです。しかも２００メートル平泳ぎだけでなく、４００メートル、５００メートル平泳ぎにおいても世界記録保持者となったのです。

ところが、嬉しいはずの世界記録は、前畑さんを一層苦しめました。「世界記録など出さなければ良かった」、「次の五輪で負けたらどうなるのか・・」、皮肉にも努力の成果が彼女を苦しめることになったのです。そして、世界記録の重圧をはねのけるのもまた、自分に打ち克つための「努力」だったのです。



1933（昭和８）年　第７回明治神宮大会
「記録を作る為の試泳」
女子平泳ぎ 200m、400m、500mの
３つで同時に世界記録を樹立
後上部にある額は、世界記録の認定証



世界記録証　400m 平泳ぎ　6 分 24 秒 8
1933（昭和 8）年 10 月 1 日

第二十四話　水泳界の変化

第19話でも少し触れましたが、前畑さんが選手として活躍するのと同時並行的に、日本の水泳界も少しずつ変化していました。日本水上競技連盟（水泳連盟）は、１９２４（大正13）年の創設当初より、男子競泳の強化を中心に事業を展開してきました。しかし、１９３２（昭和７）年の規約改正では抜本的な組織改編がなされ、事業内容も大幅に拡大されました。

ロサンゼルス大会後、水泳連盟は「全国民を対象とする水泳、水上競技の全国普及運動」を今後の事業方針に据えると発表したのです。これにともない、水泳連盟内には専門委員会が増設され、この一つに「女子委員会」が正式に設置されました。さらに委員会構成においては、元選手である女性たちが次々と委員に就任していったのです。

これまで水泳連盟以外の組織（日本女子スポーツ連盟や日本女子水上競技連盟）が主催していた女子水泳の全国大会は、これ以降、水泳連盟主催で行われるようになり、オリンピック強化選手を集めた合宿練習会も計画的に行われるようになりました。

戦前の水泳連盟史上、大幅な組織改編が行われたのは１９２９（昭和４）年と１９３２（昭和７）年だといわれています。前者は、前畑さんを含む４名の選手がハワイに遠征した年、後者は前畑さんがロサンゼルス大会で２位になった年です。偶然かも知れませんが、前畑さんの活躍と関わりながら、女子を取り巻く環境が変化していったようにみえるのです。

ベルリン出場前/前畑の優勝カップなど

前畑添書き
「秀子が頂いた優勝品の種々」

ベルリン出場祝
椙山女学園校門前にて記念撮影
前列左/小島一枝、椙山校長、前畑秀子
後列/天野コーチ

第二十五話　ベルリンへ

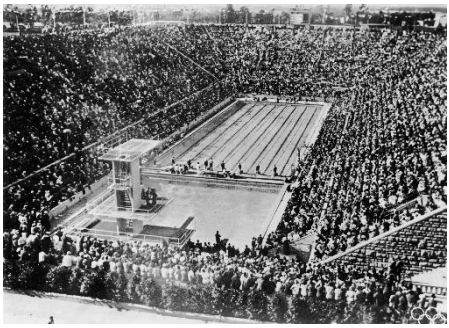
１９３５（昭和10）年10月、オリンピック・ベルリン大会の候補選手が発表され、女子選手は前畑さんを含む24名（競泳18名、飛込６名）が代表候補選手として選出されました。

この冬から翌春にかけて、水泳連盟による女子代表候補選手の強化合宿や合同練習会が複数回に渡って実施されました。その後、１９３６（昭和11）年５月に行われたベルリン大会の代表選手最終選考会を経て、女子代表選手10名（競泳７名、飛込３名）が決定しました。このうち、橋本小出身の前畑さん、小島さん、妙寺小出身の守岡初子さんの３名は、２大会連続での出場となりました。

６月20日、水泳の女子代表選手団がドイツ・ベルリンへ向けて出発しました。韓国・釜山までの船旅のあとはシベリア鉄道に乗り換え、約２週間をかけてベルリンへ向かいます。ベルリンに到着した当初は調子が上がらなかった前畑さんですが、レースが近づくにつれ徐々に復調してきたようです。

１９３６年８月１日、アドルフ・ヒトラー総統の開会宣言で、第11回夏季オリンピック競技大会が開幕しました。前畑さんが決勝で競うことになる地元のマルタ・ゲネンゲル選手は、ナチス全盛期において、女子水泳における唯一、最大の金メダル候補だったそうです。

８月８日、水泳競技がスタートしました。前畑さんの予選は８日、準決勝は９日、そして決勝は11日、運命の日は目前です。日本の前畑秀子、ドイツのマルタ・ゲネンゲル、両者ともに計り知れない重圧を背負ってのレースです。



第 11 回ベルリンオリンピック
水泳競技プール

日本女子水泳選手一同の写真
オリンピック会場前（全員のサイン入り）
選手/10 名　両サイド/コーチ
前畑/左から 7 番目

第二十六話　前畑ガンバレ

１９３６（昭和11）年８月８日、女子２００メートル平泳ぎが始まりました。前畑さんとドイツのゲネンゲル選手は、予選をオリンピック新記録で通過しました。翌日の準決勝も両者一歩も譲らない大接戦です。決勝進出を決めた２人のタイム差は、僅か０秒３です。

８月11日、午後３時40分、オリンピックプールは女子２００メートル平泳ぎ決勝の時を迎えました。スタンドはいっぱいです。大観衆に埋め尽くされています。前畑秀子６コース、マルタ・ゲネンゲル７コース、一斉にスタートが切られました。

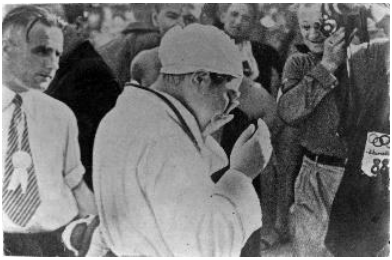
前畑さんが先頭に立つと、前畑さんを追いかけるゲネンゲル選手に対し、スタンドからは「マルタ、マルタ」の大声援です。残り50メートル、前畑さんがゲネンゲル選手を引き離しにかかります。しかし、最後の20メートルでゲネンゲル選手が再び前畑さんを追い詰めます。

「ゲネンゲルが出ております。ゲネンゲルが出ております。危ない、頑張れ、頑張れ、頑張れ、前畑リード、前畑リード、前畑リードしております。前畑頑張れ、前畑頑張れ、リード、

リード。あと五メートル、あと五メートル、五メートル。前畑リード、前畑リード、リード、リード、勝った、勝った、勝った、前畑勝った。前畑勝った、前畑勝ちました。前畑勝ちました。前畑優勝です。前畑優勝です。ホンのわずか、ホンのわずかでありましたが、前畑優勝・・・」

（河西三省氏の実況より）。

１９３６年８月11日、日本女性として最初のオリンピック金メダリストが誕生しました。現在に続く日本のスポーツ界に、新たな一歩が刻まれたのです。



優勝後プールサイドで
涙を流す前畑
勝って解放された
安堵感と嬉しさで

表彰式
日章旗が揚がると
涙が止まらなかった

第二十七話　重圧から安堵へ

計り知れない重圧の中で迎えたベルリン大会が終わりました。写真はベルリン大会の表彰式後に撮影されたもので、そこには前畑さんの自筆のコメントが綴られています。インクが色あせて読めない部分もありますが、写真に向かって左側には次のように書かれていました。

「生死の覚悟はその人を世界的にするものとは思はなかった」

この一文が、前畑さんの背負っていたものの大きさを教えてくれます。前畑さんにとって、ベルリン大会の決勝レースは、私たちには到底理解できない重圧、不安、緊張との闘いだったのでしょう。「赤いお守りを飲み込んでしまった」という試合直前のできごとからは、わらをもつかむ心境であったことが想像できます。試合終了後は、これまでの苦悩や重圧が、安堵に変わった瞬間でもあったのでしょう。

さて、前畑さんと苦楽をともにした小島一枝さんについても触れておきたいと思います。小島さんは同大会の女子４００メートル自由形で６位入賞を果たしました。日本の水泳史上、

女子の自由型種目での入賞は、１９９２（平成４）年のバルセロナ大会まで小島さんただ一人です。

前畑さん、小島さんの功績は、橋本だけでなく、水泳史に記憶されるべき大切なものといえるでしょう。

優勝後、月桂樹を頭上に，手にブーケ

前畑の添書き
写真左「生死の覚悟はその人を
世界的にするとは思はなかった」

第二十八話　選手引退、そして新たな人生のはじまり

前畑さんにも選手活動を引退する時がきました。

「自分もこのオリンピック大会を最後と致しまして引退致します。永い永い十二年間の恋しい選手生活ともオサラバです。何も思い残す事がない」と、晴れやかな気持ちで選手生活に終止符を打ちました。

ベルリンから帰国し、日本各地で行われる祝賀行事や模範水泳の催しが一段落した１９３６（昭和11）年11月3日、前畑さんは椙山校長の自宅で、夫となる兵藤正彦（ひょうどうまさひこ）さんとお見合いをしました。とはいえ、正彦さんは名古屋医科大学医学部桐原外科の助手であり、正彦さんの父である丸尾錦作（まるおきんさく）氏は、大正天皇の宮中顧問を務めた人物です。さすがの前畑さんも家柄の違いに動揺したといいます。

しかし、丸尾家の当主であり正彦さんの兄にあたる尚武（ひさたけ）氏は、「人間は健全な精神と健全な身体の持主であれば、家柄だの身分だのといふことは敢えて論ずるに及ばない。今回私の

弟と前畑嬢との婚約が結ばれたことは私も心から双手を挙げて賛成する」と言って二人の結婚を喜んだそうです。（『糸菊』昭和11年号より）

当の本人は、お見合いの席で正彦さんのお兄さんをお見合い相手と間違える早とちりもあったそうですが、１９３７（昭和12）年３月９日、熱田神宮にて前畑さんと正彦さんの結婚式が執り行われました。こうして、前畑さんの新たな人生のスタートが切られたのです。

結婚記念撮影/
新婚（夫/正彦）と撮影/
秀子（炊事・洗濯）

第三十話　再び水泳の道へ

１９６０(昭和45)年、前畑さんが椙山女学園を卒業してから25年近くが経っていました。母校に務めるきっかけは心憂(こころう)いものでしたが、椙山での医務室兼水泳コーチとしての勤務は、前畑さんに再びプールサイドに立つ日々をもたらしました。医務室の仕事に加え、水泳部の指導、さらには講演や模範水泳の依頼も増え、全国各地に出掛けることも多くなりました。

ベルリン大会以降、日本がオリンピックに再び参加したのは、第二次世界大戦後二度目の開催となった１９５２（昭和27）年ヘルシンキ大会からでした。しかし、お家芸ともいわれた日本の水泳は陰を潜め、１９６４（昭和39）年東京大会も惨敗だったといわれています。こうした状況も前畑さんには堪え難かったのでしょう。

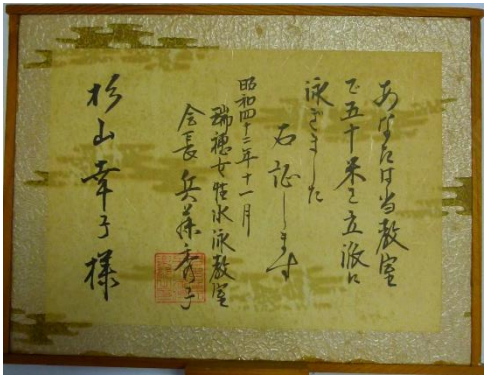
「日本の水泳界のために役立ちたい」という想いが強くなり、遂に前畑さんは水泳指導に集中するために、椙山女学園での職務を辞する決意をしました。

50歳を過ぎた頃、前畑さんは新設された名古屋市瑞穂区の温水プールに、中京地区として

は初めてのママさん教室を開設しました。それ以降、幼児、子ども、高齢者、選手養成クラスを立ち上げ、対象を広げた水泳普及をスタートさせていきました。

前畑さんはこうして始まった第二の水泳人生を通じて、自分に打ち克つ「努力」の大切さを多くの人々に伝えていくのです。

水泳教室で指導する兵藤秀子



瑞穂女性水泳教室　会長兵藤秀子
ママさん教室開設時の生徒への手づくり盾
1967（昭和 42）年 11 月

第三十一話　オリンピック・オーダー

生涯を通じて多くの賞を受けてきた前畑さんですが、ここでは１９８１（昭和56）年に受賞した「オリンピック・オーダー（五輪功労賞）」について触れておきたいと思います。

この賞は、国際オリンピック委員会が１９７５（昭和50）年に設けた賞で、スポーツ界への多大な貢献やオリンピック・ムーブメントに対し大きな役割を果たした人物に贈られるものです。前畑さんは自著の中で、受賞理由を「二度のオリンピックでのメダル獲得が評価されたのだと思う」と述べていますが、受賞理由はそれだけではありません。

メダリストは山ほどいますが、「オリンピック・オーダー」を授与されるのはごく一部の人たちだけです。前畑さんの受賞は、選手時代から指導者時代も含め、生涯を通じてオリンピック・ムーブメントの普及に貢献したことが評価されたのです。

戦前にみる前畑さんの活躍は、日本の女子水泳が組織化するきっかけとなり、現在に続く礎を築きました。引退後は講演やプール開きへの参加、水泳教室の開設など、それぞれの時

代の要請に応じながら、「オリンピアン前畑秀子」としての役割を全うしてきたのでしょう。

１９７５年に設けられた「オリンピック・オーダー」ですが、前畑さんの受賞は、東龍太郎（あずまりょうたろう）、田畑政治（たばたまさじ）、鈴木良徳（すずきよしのり）、織田幹雄（おだみきお）、鶴田義行（つるたよしゆき）に続き、日本では６人目でした。そしてこれもまた、日本女性としては初の受賞だったのです。

1981（昭和 56）年
オリンピック・オーダー（銀賞）
受賞祝賀会（前畑家ご親族集合写真）

第三十二話　自己とのたたかい

１９８３（昭和58年）４月、因縁の病魔である脳溢血が前畑さんを襲いました。69歳の時です。

前畑さんは晩年、脳溢血から再起するためのリハビリを「苦難苦行の連続で、金メダルをとるよりも大変だと何度も思った」と懐古しています。そんな苦難を乗り越える支えとなったのは、自己に克つことの大切さを教えてくれ水泳であり、夫・正彦さんの死を乗り越えたことにあったといいます。

自分と病気に打ち勝つことを決意し、リハビリの末に一年半の時を経て再びプールサイド戻ってきた前畑さんの姿は、どれだけの人にやり抜くことの大切さを伝えたことでしょう。

「リハビリは冷たいプールの中で歯を食いしばって泳ぐのと似ている、辛い練習を積み重ねて少しずつ記録を伸ばしていくしかない」というように、前畑さんはリハビリにおいても自らに勝つための人一倍の努力を重ねていたのです。

昨今のスポーツ界をみると、打ち勝つ相手が自分自身ではなく、目の前にいる対戦相手だけになっている風潮があります。相手に勝利することで得られるものは何でしょうか。

ベルリン大会での金メダル、脳溢血からの再起を通じて、自己と対峙（たいじ）することの大切さを伝えている前畑さんの姿から、私たちが学ぶべきことは多いはずです。

晩年の兵藤秀子

第三十三話　人生の金メダル

これまで、橋本時代、椙山時代、指導者時代、晩年という大きな括りではありますが、前畑さんの軌跡をたどってきました。その中で前畑さんが一貫して実践し、言い続けてきたことがあります。それは、やりはじめたら最後までやり抜くこと、自分自身に打ち克つこと、努力を惜しまないことです。

前畑さんが選手生活やその後の人生において、常に闘い、挑戦し続けてきたのは、他の誰でもない自分自身でした。自己の限界に挑戦し、打ち克とうする「努力」の積み重ねが、前畑さんの人生を拓いていったのです。

最後に、オリンピックの創始者クーベルタン男爵の言葉を紹介したいと思います。

「自己を知ること、自己を律すること、自己に打ち克つこと、これこそがアスリートの義務であり、もっとも大切なことである」

「努力は至上の喜びである。成功は目的ではなく、より高きものを目指すための一つの方法である」。

前畑さんがこれらの言葉を知っていたのかは分かりません。しかし前畑さんの姿は、これらの言葉を身をもって示していたのではないでしょうか。

前畑秀子という人は、単なる金メダリストではありません。誰との比較でもない、自らの人生における金メダルを目指すことの大切さを、自らの生き方を通じて伝え続けた「オリンピアン」なのです。

「一に努力
二に努力
三また努力」
兵藤秀子書

尾張冨士大宮浅間神社
奉納献石
（愛知県犬山市）

参考文献

◇一般社団法人大阪水泳協会
『１００年のあゆみ』ｐ．44　第二話（築港プールで開催された主な大会

写真提供（敬称略）

◇椙山女学園歴史文化館
第七話　第十話　第十一話　第十二話　第十四話　第十五話　第二十一話
第二十二話　第二十三話　第二十四話　第二十五話　第二十六話（優勝後プールサイド涙流す前畑）
第二十七話　第二十八話（新婚生活）　第三十話（プール指導）　第三十二話
◇橋本市郷土資料館
第八話　第十六話　第十七話
◇一般社団法人大阪水泳協会
『１００年のあゆみ』ｐ．44　第二話（築港プールで開催された主な大会）
◇橋本市立橋本小学校　第三話

◇㈱スポーツマックス　第二十六話（表彰式）
◇前畑秀子・古川勝資料展示館（二〇二〇年十二月閉館）　第四話
◇兵藤正臣　目次
◇兵藤尚子　第二十九話
◇林典子　第二話（昭和４年３月卒業アルバム）　第六話
◇荒見亘子　第三十一話
◇杉山幸子　第三十話（瑞穂女性水泳教室盾）

追記

本章「前畑（兵藤）秀子の生涯を綴る」は、「広報はしもと」平成27年８月号から平成30年４月号に掲載された「前畑秀子ストーリー」（全33話）に加筆・修正するとともに、橋本市まちの歴史資料保存会により、新たに写真・イラストを加えたものです。内容について、検討が不十分な点や新たな史料の発掘等がございましたら、ぜひご教示下さい。

なお、本章（木村執筆箇所）は、JSPS 科研費 JP16K21467 の助成を受けた研究成果の一部です。